

マックス・シェーラーにおける「共同感情」の二重性について

筑波大学 渡辺朱音

序

現象学者、倫理学者であるマックス・シェーラー（1874-1928）は、主著のひとつである『同情の本質と諸形式』⁽¹⁾（以下、『同情』）において、*Sympathie*⁽²⁾と呼ばれる情緒的体験を現象学的に記述してその形式を4つに区別し、さらに、愛や憎しみのような他の情緒的体験との相違を分析した。本稿ではこのジンパティーのひとつである「共同感情 *Mitgefühl*」が情緒的体験全体のなかで独自の地位を占めることを示すとともに、その二重の意義を明確にしていきたい。

シェーラーは、彼が区別したジンパティーの諸形式のなかでも特に「共同感情」、「一体感 *Einsfühlung*」を主題的に論じる。『同情』についての先行研究の多くは、共同感情を感得や認識の「機能」であり、「作用」としての愛から区別されたものとして捉えている⁽³⁾。本論において後述するが、作用は決して対象化されない人間の人格に関わることのできる運動や行為であるが、機能は対象化可能な生命や自我の領域における受動的な反応であると考えられている。晩年に哲学的人間学を創始したことでも知られるシェーラーの哲学の根幹には、「人間とは何か、存在のうちに占める人間の地位はどのようなものか」（GW9/9, 13）という人間学の問題意識があり、最終的には彼にとって人格こそが人間の特殊な地位を支えるものである。そのためこれまでのシェーラー研究では、単なる機能としての共同感情よりも、作用である愛に焦点が当てられることが多い。

実際に、シェーラーは共同感情を機能であり、感得した他者の体験や感情に対する反応や反射であるという。しかし、『同情』には共同感情を作用として記述する箇所も存在する。シェーラーの共同感情についての論究は、生命や自我にかかわる反応としての機能と、人格にかかわる運動としての作用の二重性を含んでいると思われる。

本稿の構成は以下のとおりである。(1)：共同感情と他のジンパティーの諸形式との区別および、共同感情の諸性質を検討する。(2)：機能と作用という二重性に特徴をもつ共同感情を、人格と自我とのかかわりから検討する。(3)：共同感情と他の情緒的な体験との関係を検討する。(4)：これまでの検討から、二重性をもつものとしての共同感情の内実についての考察を行う（結論）。

1. ジンパティエの4区分と共同感情の諸性質

本章では、シェーラーが4つに区別したジンパティエの諸形式について整理し、他のジンパティエの形式との相違の検討を通じて本稿の主題となる共同感情の性質を明らかにする。

『同情』においてシェーラーは、共同感情の現象の輪郭を明確にするために、ジンパティエの形式を、「(1)「あるひととの」、たとえば同一の苦しみを、直接的に共感すること（相互感得 *Miteinanderfühlen*）、(2)「あることへの」共同感情、つまり、あるひとの喜び「への」共歓、痛み「との」共苦、(3)単純な感情伝播 *Gefühlsansteckung*、(4)真の一体感」（GW7/23, 41）の4つに区別する。

相互感得について、シェーラーは子供を亡くした父母の例を挙げる。このとき父と母は完全に同一の痛みを感じており、他者の感情が志向の対象になることはない。相互感得は、ある人と同一の情緒的活動を感得し、体験するという意味で、同一の感情を共にしている。私の痛みと他者の痛みは同一の事実なのである。

それに対して共同感情は、他者の痛みや喜びを感得⁽⁴⁾する志向性を含んでいる。たとえば、子供を亡くした父と母のそばに友人がいたとする。両親の痛みがひとつの事実であったのに対し、両親の痛みと友人の共苦は「現象学的に二つの異なった事実」（GW7/24, 43）である。共同感情は、他者の痛みという体験や感情を志向し共に苦しむことであって、相互感得のように他者と同じ感情を感得することではない。

共同感情は、「われわれにとって他なる存在者の体験が直接「理解」されるようにみえ、しかもわれわれがそれに「参与する」（思い遣る）ような」（GW7/17, 29）過程であり、共同感情においては他者の体験の理解と、他者の体験への参与（思い遣り）のふたつが異なった現象として、しかし同時に発生している。シェーラーは共同感情について、「他なる存在者たちの体験、さらにかれらの感情の諸状態を体験することをもふくめて、これを単に把握し、理解し、場合によっては追隨的に生きる（「追感得する」）ことのみ用いられるような一切の態度から切りはなされなければならない」（GW7/19, 33）という。シェーラーにとって共同感情は「つねに、あらかじめ理解され把握された他人経験に付加されるもの」（GW7/19, 34）であり、共同感情によって原初的な他者体験が可能になるわけではない。むしろ、他者の体験や感情状態の理解や追感得は、共同感情の成立にとって必要な前提とされる。しかし、「追感得と追体験とは他者体験へのいかなる「思

い遣り」をもふくまない」(GW7/20, 35) ため、共同感情の成立には、他者の苦しみを追隨的に受容する(追感得する)、追感得した体験や感情を他者の苦しみとして把握したうえで、それを共に苦しむ(共感得する)という二重の志向的關係が必要とされる。

第三に「感情伝播」は、つられ笑いやもらい泣きのように、誰かの感情や空間の雰囲気感染し、その感情のなかに「一緒に引きずりこまれる」(GW7/26, 46) ことを指す。感情伝播においては、他者の感情や体験への志向的關係も思い遣りも成立しておらず、感情の対象や原因に対する認識もない。

第四に「一体感」は、感情伝播が推し進められた結果、他者の感情だけでなく他我と自我までもが同一視される状態である。シェーラーは、一体感の現象を「特発性型」と「異発性型」(GW7/29, 51)、「相関的融合現象」

(GW7/36, 61) の3つに分類する。特発性型一体感の状態では、他者の生がもはや私の生であるとみなされるほどに、他者と感情を共にしている。反対に異発性型一体感の状態では、私の生が他者の生のうちに取り込まれる。特発性型と異発性型は、自我もしくは他我のどちらかに優位性が認められ、片方がもう片方によって置き換えられるような状態である。相関的融合現象は、シェーラーによれば「真の一体感」(GW7/36, 61) であり、この基本的形式は愛に満たされた性的交渉や、未組織集団(群衆や世論など)の心的生活にあらわれる。この場合、自我と他我のどちらかに優位性がのこることとはなく、どちらもひとつの生の流れのなかに失われる。

以上で整理したジンパティエーの4区分のなかで、『同情』で論究される現象はおもに共同感情と一体感である。以下では共同感情と一体感の相違を通じて、共同感情が他者との距離を前提にすることを検討する。

シェーラーは、共苦とは「この他人としての他人の苦しみを苦しむこと」(GW7/48, 80) であるという。他者の感情を自分の感情と同一視して感得したり、他者と自分の同一視によって他者の感情を共感得したりすることは、共同感情とはいえない。「もしもわが身に同じようなことが降りかかったならば、それは一体どのようなことだろうか？」この種の思案が生活のなかでどんな位置を占めるにせよ、それは真の共同感情とはまったく無縁である」(GW7/50, 84) という記述は、他人事を自分事として考えるようとする態度への明確な批判である。そのような態度の場合、他者の感情は自分自身の感情へとすり替わってしまい、「単にわれわれの苦しみやわれわれの喜びにむけられた態度のみが、すなわち利己的態度のみが、与えられるにすぎない」(GW7/51, 85) ののである。また、自己と他者の同一視においては、自分

がすでに体験した体験や感情に関してしか他者に共感することができないが、われわれは自分の体験したことの無い他者の体験に対しても共同感情を持つことができる。共同感情は、自己と他者の体験や環境、状況の一致や類似に制限されることはない。

シェーラーは「真の共同感情のための前提となる人間の自己意識、自己感情、いわば自己自身の生が、そしてそれらとともに体験された他人との「距離」(GW7/55, 92)が、自己と他者を同一視する生においては破壊されてしまうという。共同感情は、自己と他者の体験や感情の区別を前提に成り立つ。共同感情は「人格の本質的同一性を示しているわけではなく、むしろ反対に、真の共同感情こそ純粋な本質的差異性を、(これがまた人格の実在的現存在の差異性を示す究極的根源でもある)、あらかじめ前提している」

(GW7/76, 128)と論じられることから、ここでの自己と他者の距離とは物理心理的な距離ではなく、人格の差異性に基づく人格的距離であると考えられる。人格的距離は、「他人との最大限の「接近」にさいしても、かれが本質必然的にそこにいるという事実、ならびにあらゆる可能的な共同体験にもかかわらず、絶対的に閉ざされたままであるという事実」(GW7/77, 129)としてわれわれにアプリアリに把握されているという。他者との人格的距離は、他者の絶対的な個性と言い換えることができる。われわれは、他者とどれほど親しくなったとしても、他者の絶対的に内奥な人格の個性を暴くことはできないのである。

共同感情の成立において、他者の感情や体験を他者のものとして、すなわち自分自身との異質性として把握したうえで積極的に参与し思い遣ることが必要である。追感得と共感得という異なるふたつの現象から成り立つという点、自他を同一視する態度とは鋭く区別され、他者との人格的距離を前提とするという点が、共同感情の独自の性質であると考えられる。

2. 共同感情の機能と作用

他者との絶対的な距離を前提とした共同感情において、われわれは他者の人格そのものにかかわることはできないのだろうか。本章では、共同感情が機能であり作用でもありうるという二重性を指摘するとともに、人格的距離がある他者の人格に関与し共感することがいかにして可能なのか、その契機のひとつとなる純粋な共同感情について検討する。

機能とは、見ることや聞くこと、何かを感じる事など、なんらかの内容を受容するはたらきであり、価値や状態の感得も機能のひとつである。一方で、作用は認識作用、愛憎の作用、意志作用などの行為や運動であり、なに

かを為す自発的なはたらきである。「すべての機能は第一に自我機能であり、けっして人格領域に所属するものではない。機能は心理的であり、作用は非心理的である」(GW2/386, 40) という記述から、作用は人格に、機能は心的自我にかかわるはたらきであるといえる。自我は内部知覚に与えられた心的体験の統一体であり、知覚や理解や感得の対象になる。人格は「相違せる本質の諸作用の具体的なそれみずからの本質的な存在統一」(GW2/382, 33) であり、諸作用は人格に所属することで具体的に遂行可能になる。遂行された作用は知覚や感得のような仕方で対象化して把握することはできず、作用の具体的遂行の中心である人格についても同様である⁽⁵⁾。われわれがある人間を対象化しようとするれば、彼の人格は「われわれの手から滑り落ち、ただその抜け殻がのこるだけ」(GW7/169, 280) なのであり、人格はつねに作用遂行によって直接的に体験するという仕方でのみ与えられる。人格とは、自我のように対象化できる心的現象の総体としてではなく、すべての作用や運動の主体としての生きたその人自身であるといえる。他者の人格にかかわるためには、他者という人間を対象化しようとする態度から脱却し、他者が遂行する作用を共に遂行することが必要である。

シェーラーは「真の共同感得はあくまで単なる一つの機能」(GW7/52, 87) であり、「追感得にもとづく共同感情は、本質的に一つの「受苦」であって自発的作用ではない。さらに反作用であって、作用ではない」

(GW7/78, 130) という。共同感情の機能は追感得した他者の体験や感情に対する受容的な反応あるいは反射であり、他者の心的自我の領域にのみかかわると考えられる。しかしシェーラーは、「純粋な共同感情が人間精神の本質に帰属するものとするれば、かくして共同感情は、「他者の価値一般」というアプリアリな質料をとまなうアプリアリな作用としても示される」

(GW7/71, 120) とも述べ、共同感情が機能と作用の二重性をもつものであることを示唆する。この二重性において共同感情は、他者との作用の共同遂行として他者の人格に関与する可能性を持ちうる。純粋な共同感情という契機によって、共同感情は作用になりうる可能性を獲得するのだ。純粋な共同感情は、「人間を人間として（ないし生けるものとして）、等価値のものとしてとらえるという」(GW7/70, 118) 把握を可能にする。ここでシェーラーが問題にする自己と他者の等価値性の把握とは、他者の実在性を自己の実在性と等しく意識することと言い換えられる。シェーラーは、われわれは自然状態においては他者の実在性を自己の実在性と同等には意識していないとし、このような独我論的態度は共同感情によって克服できると論じる。ただし、このような他者の等価値性の把握に至るには、単に個別的な他者を対象

とすることや、偶然的な他者との出会いによって共同感情が生起することだけでは不十分である。

いまや他者の苦しみの本質がそもそも「形相化して」とらえられ、共感の「純粹」機能が持続的・構成的態度として、この最初の「誘因」をはるかに越えて、一切の他者の存在と他者の価値にむかって自由にひらかれひろげられてゆくのである。(GW7/71, 118-119)

個別的・偶然的な他者との出会いを出発点に、その感情や体験の本質を志向することであらゆる他者の存在に向かって共同感情がひらかれていくと、個別的な共同感情の機能は純粹な共同感情の機能へと発展する。シェーラーは、仏陀の出家の契機にこの発展を認めている。そこではひとりの病人やひとりの死者との出会いがあらゆる他者の病や死の苦しみの例証としてとらえられることで、あらゆる他者の存在を等価値のものとして把握するに至るのである。

人格的距離のある他者とのかかわりにおいて、われわれはつねにその距離を克服することはできないが、距離があったとしても他者の人格に関与するという仕方に関係を結ぶことはできる。その際に必要な契機が純粹な共同感情であり、眼前の他者の個別性・偶然性を越えた感情や体験の本質への志向である。純粹な共同感情において、一切の他者の実在性が自己の実在性と等しく把握される。純粹な共同感情は共同感情が作用としてのはたらきを獲得するためのひとつの契機として位置づけられる。しかしこの時点ではまだ、共同感情は作用であるとはいえない。次章では、共同感情が作用としてのはたらきを得るためにはさらに何が必要なのかについて検討する。

3. 共同感情と他の情緒的体験との関係

シェーラーは、一体感、追感得、共同感情、人間愛、人格と神に対する無宇宙的な愛のあいだに「基底づけ Fundierung」(GW7/105, 174) という本質的關係があるとする。諸情緒的体験のそれぞれの基底づけ関係は以下のとおりである。

- a 一体感は追感得を基底づける
- b 追感得は共同感情を基底づける
- c 共同感情は人間愛（フマニタス）を基底づける
- d 人間愛は人格および神に対する無宇宙的な愛を基底づける

本章では基底づけ関係を整理し、共同感情が基底づけるとされる愛との関係を詳細に検討することで、愛が共同感情の作用の成立におけるもうひとつの契機であることを明らかにする。

1で、共同感情は自分自身の体験に限定されないと述べたが、このことは共同感情の基底となる追感得についても同様である。シェーラーはその理由を、「追感得された状態の質を、いつか一度は、わたしが追感得した（直接に、あるいは、たとえば以前にこの類との一体感をもった第三者との一体感をとおして間接的に）この主体の属する類との一体感をとおして保持」

（GW7/105, 175）しているからであるとする。一体感は実際の自分の体験を越えた、豊かなジンパティーを可能にするのだ。追感得が共同感情を基底づけるという関係については、1で述べたとおりであるため省略する。端的に繰り返せば、共同感情は追感得のうえに共感得（参与・思い遣り）が成り立つことによって可能になる。

前章で論じたように、共同感情によって他者と自分との等しい実在性の把握が与えられるが、共同感情は「われわれが共感している当の主体が現に振るまう態度とむすびついている」（GW7/107, 178）のであり、共同感情の対象は虚構やイメージとしての他者ではなく、行為や言葉、表情など、振る舞いの主体として実在する他者に限られる。純粋な共同感情によって、自分がつくりだした虚構やイメージを投影した他者像を現実と誤認する態度が克服される。他者を自己と等しく現実的実在として把握することが人間愛を基底づける。人格および神に対する無宇宙的愛は、キリスト教の神における隣人愛をモデルとした、すべての生命的実在＝宇宙⁽⁶⁾という制約の取り払われた精神的な人格に対する愛である。人格および神への愛は、実在性としての人間への愛（人間愛）を越えて、他者をひとつの人格として愛する。

ある人格自身の生命自我にひとしい他人の生命自我ないしその基底のとり実在的態度が、共同感情をとおしてあらかじめ遂行されていて、この共同感情にもとづいた自発的人間愛をたえずその深層へとおしひろげ、人間における人格存在がはじまるいわば出発点にまで突きすすむ場合、まさにこうした場合にのみ当の主体（その純粋なノエシス的作用とその作用意味）がある他人に（純粋に精神的な意味了解をとおして）与えられるようになる。（GW7/108, 182）

共同感情あるいは人間愛の向けられる対象としての他者は、自己と同等の

実在性をもつ自我としての他者であり、人格の領域には至っていない。人間愛は「それぞれの人を類としての「人間」のたんなる「例証」として愛しつとらえる」(GW7/110, 183) はたらきを担い、人格への愛とは明確に区別されている。しかし、人格への愛は人間愛に基底づけられることによって実現されるため、人格への愛が可能でありうる場所や範囲は、人間愛によって定められる。人間愛は他者の人格にかかわることなく可能であるが、他者の人格そのものを愛する人格への愛に発展するための枠組みを提供するという仕方で基底になっている。人格への愛においては、「他者を愛し了解する自発的作用にのみ依存しているのではなく、愛すべきあるいは精神的に了解すべき相手の人格のくたす自由なる裁量にも依存するという」(GW7/110, 183) 新しい法則があらわれる。人格への愛は、他者の側からの自発的な開示というはたらきかけに応答するという双方向的作用によって可能になる。

共同感情が人間愛を基底づけ、人間愛が人格への愛を基底づけることから、共同感情は他者への愛一般を基底づける現象であるといえる。以下では、愛の諸性質と共同感情との相違を整理し、共同感情と愛の関係をより詳細に検討することで、愛と共同感情の基底づけ関係の双方向性を明らかにする。

シェーラーは、愛は「価値を創造する運動」(GW7/121, 201) であり、「作用の究極的本質として、もっぱら直観されうるにすぎない」(GW7/155, 256) という。愛は単なる感情状態や事実の複合に還元したり感情状態や諸事実によって変えたりすることのできない人格の作用であり、感情の源泉となる。愛される対象に対する「このようにあるべき」という教育的態度は愛といえず、愛は愛される対象をあるがままの姿において愛する。愛はより低い価値からより高い価値存在に向かう運動であり、「この運動においてはじめて、対象もしくは人格のより高い価値が突如としてきらめきでてくる」(GW7/155, 257)。共同感情とは違い、愛はつねに作用であって機能ではない。共同感情はある対象の価値や状態の感得という受容機能を基盤とするが、愛は本来的に対象化されない人格に結びつく作用であるから、感得機能とは無関係に生じる。また、共同感情のはたらきが基本的に受容的な反応であるのに対し、愛は自発的な応答である。

以上で示されたように、共同感情と愛とは異なる現象であるが、先に示されたように、共同感情は愛の発生のための基盤となる。しかしさらに注目すべきは、シェーラーが「あらゆる共感のはたらき一般がある種の愛に基底づけられており、一切の愛を欠くときには共感もまた消滅する」(GW7/147, 243) とも述べていることである。愛は共同感情が向かう対象を指示し、共同感情は愛によって方向付けられる。ひとは愛していない相手に共感するこ

とができて、愛している相手に共感しないことはできないのである。また、シェーラーは、共感の対象を愛していない場合、「われわれの共同感情はただちに終焉し、人格中枢にせまることは決してない」(GW7/147, 243)という。共同感情が与える他者の実在性は愛を基底づけるが、愛は共同感情に方向性と持続性、発展性を与えることで共同感情は他者の人格にかかわる作用になりうる。他者への愛こそが、共同感情が単なる機能を越えて作用としてのはたらきを獲得するためのもうひとつの契機であり、この地点で共同感情は作用になりうるのだと考えられる。

4. 結論 —共同感情の二重性の内実—

本稿の目的は、共同感情の二重性の内実を明らかにすることで、共同感情を情緒的体験全体のなかで独自の地位を占めることを示すことであった。これまでの検討により、共同感情のもつ機能と作用の二重性、すなわち他者の心的自我にかかわる側面と人格にかかわる側面との二重性の内実についての考察が可能になるだろう。

共同感情は、他者の感情や体験を追隨的に感得する追感得の機能に基底づけられ、追感得は一体感という自我と他我を同一視する現象によって基底づけられる。共同感情が間接的に一体感に支えられることで、ひとは自分自身の経験したことがある感情や体験以外にも共感できる。

共同感情によってわれわれは他者の感情や体験に個別的に共感できるが、自己と他者のあいだにはつねに絶対的な人格的距離がある。他者の個体的な人格に関与するには、個別的で偶然的に出会う他者の感情や体験だけではなくその本質を志向することで、共同感情の機能が純粋な共同感情に発展することが必要である。純粋な共同感情は、人間愛を基底づける自己と他者との等価値な実在性の把握を可能にする契機である。この時点での共同感情あるいは人間愛は、他者の人格にまでせまることはない。しかし、ある他者をあらゆる人間のひとりだと捉えて愛する人間愛を基底とすることで、個別的な人格への愛が可能になる。純粋な共同感情は愛を基底づけるが、愛が共同感情を基底づけるという双方向性がある。愛は作用として、他者の人格にかかわりうる。シェーラーは、一切の愛を欠くときには共感もまた消滅し、愛のない共同感情は他者の人格にせまることがないとする。他者への愛こそが純粋な共同感情を共同感情の作用に発展させると考えられる。

本稿において明らかにした共同感情の二重性の内実を整理しよう。共同感情の機能は自我と他我の同一視としての一体感に間接的に支えられる。一体感に基底づけられた追感得に他者への積極的参与としての共感得が加わるこ

とで、自他の人格的距離の把握を前提とする共同感情が可能になる。現実的な他者への偶発的・個別的な共同感情の機能が、その偶発性・個別性を超えてあらゆる他者にひらかれることによって、共同感情はあらゆる他者の等価値性の把握を可能にする純粋な共同感情となる。純粋な共同感情は人間愛を基底づけ、人間愛は人格愛を基底づける。ここではまだ、共同感情は作用ではない。共同感情が愛を基底づけると同時に、愛も共同感情を基底づける。他者の人格への愛に基底づけられることによって、共同感情は単なる受容的機能としての偶発的・個別的で不安定なはたらきから、他者の人格にかかわるという共同感情の自発的作用へと発展する。

本稿において共同感情は、純粋な共同感情という他者との等価値性の把握をひとつの契機、そして他者への愛をもうひとつの契機として、機能から作用へと発展する可能性をもつ、すなわち心理的現象という対象としての他者への共感からひとりの生きた人格としての他者への共感にひらかれていく可能性をもつ現象であると位置づけられる。共同感情が自他の距離を前提とすることは何度も繰り返した通りだが、それが自我と他我の同一視である一体感に支えられる点、距離がありながらも他者の人格に関与しうる発展可能性をもつ点が、共同感情という情緒的体験の独自性であると考えられる。

注

(1)本稿におけるシェーラーの引用の邦訳は、『シェーラー著作集』（白水社、1976－1980年）を使用させていただいた。参照指示の後に、文献の表題の邦訳のページ数を記す。

(2)シェーラー研究において、*Sympathie* (*sympathy*) は「同情」が定訳であり、感情移入と訳される *Einfühlung* (*empathy*) とは明確に区別される。しかし、シェーラーのいう *Sympathie* とは、人間を含む生物間で引き起こされる広汎な相互感応現象であるため、同情と呼ぶには不適切であるとも言われる（『同情』訳者解説、白水社、1977年、444頁）。紙幅の都合上、本稿では *Sympathy* と *Empathy*、および同情と共感の思想史的区別については立ち入らないが、上記のような混乱を避けるため、*Sympathie* について言及する際にはカタカナで「ジンパティエ」と表記し、ジンパティエを抱くことについて「共感する」という語を用いる。

(3)金子晴勇『マックス・シェーラーの人間学』、創文社、1995年、斎藤伸「共同感情と間主観性理論：マックス・シェーラーにおける他我知覚の四区分」、『聖学院大学総合研究所紀要』52、2012年、240-261頁、McGill,

V. J. "Scheler's Theory of Sympathy and Love", *Philosophy and Phenomenological Research*, 2, 1942.

(4) シェーラーは、感情状態と感得機能の区別を強調する。感情状態は、感得のあり方や様態をひとつに規定するものではなく、感情の内容や現出に属するものである。それに対して感得は、感情状態をうけとる機能であり、受容された質は変異しうるものであるとされる。シェーラーは、この区別を苦痛に焦点を当てて論じることが多い。ある苦痛という感情状態に対してわれわれは、「それに「耐える」、それを「許容する」、時にはそれを「楽しみ」さえもする」というように、多様な受容の仕方をとることができる (GW2 261, 162)。

(5) 「作用が対象でないことが確かであるならば、作用の遂行のうちに生きている人格がけっして対象でないことは当然である。」 (GW2/ 386, 39)

(6) シェーラーは、宇宙を「生きとし生けるすべてのもの、したがってまたそれ自身のために存在する動物や植物をもふくめた、否、究極的には全世界の現実的存在一般」として規定している (GW7/89, 149)。

(10693 字)

参考文献

【一次文献】

略号表

〈Scheler, Max〉

GW2 : *Der Formalismus in der Ethik und die materiale Wertethik*, in: *Gesammelte Werke Bd. II*. Francke Bern, 1954. (『倫理学における形式主義と実質的価値倫理学』、『マックス・シェーラー著作集 1』吉沢伝三郎訳、1976年；『マックス・シェーラー著作集 2』吉沢伝三郎・岡田紀子訳、1976年；『マックス・シェーラー著作集 3』小倉志祥訳、1980年)。

GW3-a : *Die Idole des Selbsterkenntnis*, in: *Gesammelte Werke Bd. III*, Francke Bern, 1955. (「自己認識の偶像」、『マックス・シェーラー著作集 5』大谷愛人ほか訳、1977年)。

GW3-b : *Das Ressentiment im Aufbau der Morale*, in: *Gesammelte Werke Bd. III*, Francke Bern, 1955. (「道徳の構造におけるルサンチマン」、『マックス・シェーラー著作集 4』林田新二訳、1977年)。

GW7 : *Wesen und Formen der Sympathie*, in: *Gesammelte Werke Bd. VII*. Francke Bern, 1973. (『同情の本質と諸形式』、『マックス・シェーラー著

作集 8』青木茂・小林茂 訳、白水社、1977年)。

GW9 : Die Stellung des Menschen im Kosmos, in : Gesammelte Werke Bd.IX. Francke Bern, 1979. (「宇宙における人間の地位」、『マックス・シェーラー著作集 13』飯島宗享・亀井裕 訳、1977年)。

【二次文献】

Gallagher, Shaun, "Direct perception in the intersubjective context", *Consciousness and Cognition*, 17, 2008, 535-543.

Hartmann, Wilfried, *Max Scheler : Bibliographie*, F. Frommann, 1963.

Luther, A. R., *Persons in love : A study of Max Scheler's Wesen und Formen der Sympathie*, The Hague , Nijhoff, 1972.

McGill, V. J., "Scheler's Theory of Sympathy and Love", *Philosophy and Phenomenologica Research*, 2, 1942.

Ratcliffe, Matthew, "Phenomenology as a Form of Empathy", *Inquiry*, 55(5), 2012.

Zahavi, Dan, "Simulation, projection and empathy", *Consciousness and Cognition* 17, 2008, 514-522.

——— Empathy, Embodiment and Interpersonal Understanding: From Lipps to Schutz, *Inquiry* 53(3), 2010, 285-306.

フリングス, マンフレート, S『マックス・シェーラーの倫理思想』、深谷昭三・高見保則 訳、以文社、1988年。

金子晴勇『マックス・シェーラーの人間学』、創文社、1995年。

熊谷正憲「M. シェーラーの共感論の批判的考察」、『徳島大学総合科学部人間社会文化研究』、5、1998年、1-19頁。

———「M.シェーラーの共感論について」、『徳島大学総合科学部人間社会文化研究』、4、1997年、47-66頁。

斎藤伸「共同感情と間主観性理論：マックス・シェーラーにおける他我知覚の四区分」、『聖学院大学総合研究所紀要』52、2012年、240-261頁。